

資料：

## 寺内文庫と私

福田 百合子

昭和16(1941)年太平洋戦争の始まった年、県立大学の前身山口女子専門学校は発足しました。今の附属小学校(白石)が、山口高等女学校で、その校庭の建物、同窓会の要会館が拠点でした。同じ年に私は一年生としてこの女学校に入学しました。県内唯一の五年制女学校で更に高等科二年、専修科三年(四年生高女からの進学)があり、この二科が、専門学校へ移行とのことでした。校長の中谷先生が近藤篤先生に変わり、新に専門学校着任の諸先生も兼務で、女学生の私達も教わりました。平家物語研究で著名な永積安明、万葉集の鴻巣隼雄、芭蕉研究井本農一など、実に壮々たる諸先生方です。戦争悪化で疎開中だったからとの説は有力ながら、私達には胸ワクワクの授業でした。

翌昭和17(1942)年には宮野桜島、今の南キャンパス旧社会福祉学部棟の道路際に東西一棟建築となり、木材のワク組みが出来た矢先に、台風襲来。ペシャンコに崩れたのです。ひどい風で、野田学園の寄宿舎にも被害が出たと聞きました。

その当時、宮野桜島の説明には必ず寺内文庫の名前が出たものです。山口線に乗って宮野駅で降りると、直線、まっすぐ歩くと突き当りにすぐ、コンクリート造りの四角の、一寸ハイカラな建物、「寺内文庫」宮野出身の寺内元帥ゆかりの図書館との案内でした。

崩れた校舎は、間もなく再建され、道路近く一棟だけでしたが赤い瓦の屋根が一寸嬉しい感じでした。私は四年生の時の殆んどは学徒動員令の下、学校工場での風船爆弾の和紙糊張り作業と、続いて小倉造兵局での作業、爆撃空襲で引き揚げ、すぐ湯田飛行機工場で翼と車輪作りに従事しました。3月の卒業式も4月の入学式もなく、8月まで湯田へ通い、次は光の海軍工廠へ、交替動員が決まって、やっと、宮野桜島の校庭へ集合。暑さの中、校舎から一段高手の運動場の草むしりに従事していたのです。来週にでも光行きなので、小倉から送った布団袋はそのままにしての待機中の感じで、8月15日。一棟きりの校舎と呼ばれ、天井の無い、ムキ出しの棟木を振り仰ぐ講堂で敗戦、終戦を知らされました。草むしりを続けながら熱い涙と汗を流しつづけました。天井が無いのは、空襲の際、焼夷爆弾を落とされると、天井に止まって火災になりやすいからと。後に入学

して、冬、雪が教室へ、瓦の間から舞い込んだことでした。暖房は、教室の後隅に置かれた角火鉢一つのみ。炭も少なく、木切れや紙くずや、色々燃やして、煙がくすぶり、涙が出たり咳をしたり、鼻水をすすりながらの授業でした。

現在の芝生の前庭はすべて芋畠。茎と葉も食べました。さつまいも掘の日は、先生方もリュックサックを背負って持ち帰られました。学生たちも少し分け合いました。

寺内文庫は、地域の文庫との位置づけで、学校とは直接の関わりでは無かったようです。

けれども図書館としては開かれていたようで、後に学生部の事務に入られた大枝の小母さんと竹中茂子さんが受付けなどお世話をされていました。

大枝さんは文庫斜前角の住居に、学校の用務員さんである大枝の小父さんご夫婦。竹中さんは旧姓佐田さん。現在の井筒屋横、マンション建設中の場所にあった「佐田楼」と呼ばれた名料亭のお嬢さん。竹中に嫁ぎ、未亡人になられての勤務。そういえば同じ名料亭葉香亭のおごうさま(清子さん)の妹、達子さんも一時、文庫勤めでした。

女専開学より前から既に四国から山口へ移って来られた太田静一先生が、丹前姿のまま走って文庫に駆け込まれる姿を見かけたものです。先生は単身で、学校前のバス停に直近牛小屋の後の下宿から、文庫迄、走られたのです。竹中さん、大枝さんにお世話になったと、よく後々まで話されました。

寺内文庫のすぐ裏の女主、桑原華子さんも長い間文庫勤めをされました。大枝の小母さん、竹中さん、桑原華子さんは、三人共、文庫が大学所属となつてからは、司書免許の職員に変わって、学生部所属の事務職として、学校の方へ通われました。

女専時代の学生としては、まだ図書館としての使用は無かったと思います。校内には、附属幼稚園室の一部屋と、図書室と呼ばれる一室が並んであり、それを使っていたのです。ただ、太田先生始め、諸先生は寺内文庫の方へよく出入りされていました。私達学生は、桑原家との間に建っていた朝鮮館の方を便利に読書室にしたものです。句会、歌会、読書会、新聞部、校友会誌編集部になったりしました。その際、好奇心から寺内文庫を覗く文学少女もありましたが。

朝鮮館はその後、手入れがなされず、とりこわしの後、枕亭風の小ぶりな建物として、しばらくは使われました。私は昭和23（1948）年に卒業、25（1950）年5月15日短大開学式の日から助手一号として初めて勤務以降、図書購入の度にまず、寺内文庫へラベル張り登録の為、運んだものです。終了の電話を貰って、また、研究室から通ったものです。朝鮮館も無くなっていましたが文庫の裏手は涼しい風が通り抜け、季節には山桃が実って、濃い紅の踏み色が鮮やかなのでした。山桃の木は今もあって懐かしい限りです。六月の梅雨の頃でした。

桑原華子さんの叔父様に当たる桑原六郎氏もしばらく図書館事務局長を務められました。文栄堂書店以前には白銀書店が大手でした。文章堂という書店も早間田にありました。古書店としては堅小路の「かけはし」が古くからあったのですが、後々迄、早間田角の第三書房の店主、友広保一氏がよく出入りされました。歌人でもあった友広氏は歌会も催されたり、中也とも面識がおりだったようです。

戦後の印刷物の少なかった時代から、新刊書も揃うようになると、寺内文庫は随分と整備されました。道路側の窓ガラスが明るくなり、開架の書棚が並び、閲覧室として、学生がよく利用するようになったのです。



写真 旧桜園寺内文庫内の様子（1955年）

助手としても、納入の為だけでもなく、よく出入りをしました。

半地下の書庫、階段、受付口後の館長室なども興味深く眺めました。上質の木製の書棚や調度品、階段の手すりなどすべて重厚で、奥床しい感じに包まれたものです。

徒歩や、バス、列車（汽車）通学の道すがら、寺内文庫をぐるりと巡るように足を運んだものです。秋、公孫樹の葉がまっ黄色に彩り明るみ、散り始めると、靴先を埋め、蹴り上げるように歩きました。

やがて銀杏のぶよぶよの実が落ち始め、酸っぱいような、口をすぼめたくなるような匂いに眉をしかめたものです。ご近所の人たちが粗い編目のドン袋を持って、このぶよぶよを拾い集めに来られました。

くくった袋のまま小溝の流れに添わせ、洗われるとあの、まっ白な銀杏の堅い実が現れるのです。ホーロクで炒って薄緑から黄色に、あの茶碗蒸に欠かせぬ一品になるとは。とても信じられない、秋の寺内文庫、学校への近道です。

公孫樹の大木の先には、文庫に向きあい、自然石に版画風にぎっしり漢字を刻んだ石碑が立っています。藤田先生という優れた漢学者の顕彰碑と聞かされ、文庫への出入りの度に振り仰ぎました。後に拓本が採られ、その全文読解、寺内元帥の直属武官だった人の由。それぞれ文武の道への造詣の深さが窺える実証でした。

女専で漢文は必修科目で、山口大学からは石黒先生が非常勤講師として、学内の太田静一先生の「諸子文粹」講読。石黒先生の名調子「温水々なめらかに凝脂を洗う」と口ずさむことが流行し、「人徳必隣有」など熟語の由来に感心したりで、特に藤田漢文石碑を畏敬の眼で眺めたことです。

寺内文庫内の漢籍文書類はその面からも尊重されたのでしょう。終戦後、宮野進駐軍（旧四十二連隊兵舎）ニュージーランド軍司令部からの焚書命令は、何んとか少し焚き火をしてゴマ化し、過ぎたものの、韓国からの文庫文書返却要請には、苦慮されたとか。

教員組合運動華やかにし当時のこと、書記長の太田先生は、遙々寺内家の子孫を移っておられた横浜や藤沢を訪れ、詳しい経緯（正規の寄贈・所有者など）を持って、保存の努力をされたこと、聞かされました。助手時代は、組合活動のお手伝いをしていて、メーデー行進や、全国大会総会（宇治開催の地名に魅かれて）へも出席、賃金アップの県庁陳情団にも加わった日々が思い出されます。

私の青春のまっただ中に、寺内文庫のたたずまいが、山桃や公孫樹や、書物の手ざわりと共に、よみ返ってきます。ささやかにでも語りかけ、書き止める作業によって、これからの方達への繋がりになればと、卒寿を過ぎての「問われず語り」の一節でした。

注）写真『山口女子短期大学卒業アルバム』より